

**「安心・安全の視点から食の付加価値向上を目指す
マーケティング調査分析に関する研究」結果概要**
— 食の安心・安全に関する全国の消費者調査 —

2009年9月7日

釧路公立大学地域経済研究センター

I 本調査研究の趣旨

世界的な経済環境の激変や政府財政状況の深刻化などにより、地域経済を取り巻く環境には大変厳しいものがあります。その中で、地域が自力で生き抜いていくためには、地域資源を有効に活用し、自らの知恵と努力でその付加価値を高めながら地域経済の力を高めていく取り組みが重要です。特に、北海道においては、恵まれた食生産力を活かした食産業の発展が期待されています。しかしながら、生産量だけでなく食の価値を高めていく努力も大切です。北海道の食は本当に安心、安全なのでしょうか。

近年、食品の偽装問題や表示の改ざんなどの事件が相次いだことから、消費者の間では、食の安心・安全に対する意識が高まってきていますが、11年前に発覚した別海町産イクラが原因によるO157事件、一昨年に全国的に注目を浴びた「白い恋人」の賞味期限改ざんやミートホープ社事件など、食品問題では、北海道で活動する企業がかかわった事件も少なからず見られます。そのため、今後北海道が食産業の付加価値を高めていくためには、北海道の食の安心、安全に対する全国の消費者意識を詳細に、科学的に分析した上での取り組み、戦略立案が必要です。

以上のような問題意識のもとに、釧路公立大学地域経済研究センターでは、食の安心・安全と地域イメージ、食を取り巻く事件の影響、食の安全性確保による付加価値創出の方向性、認証制度等について、幅広く全国の消費者500人を対象にマーケティングデータを収集し、北海道さらに釧路・根室地域の食産業の付加価値向上に資するための分析を行ったものです。

II 調査の総括

- ◎ 食品を購入する際に、食品表示の中で原産国や原産地は大きな要素となっており、**食の安全性の高い食品としては、輸入品<国産品<北海道産品の順で認識されている。**国産品と北海道産品については、**道内在住者で約8割、道外在住者でも約4割が、北海道産は他の国産食品よりも安全と感じている。**一方で、**地産地消が食の安全性にとって重要と考えている人も多く、**まず地元北海道民が道産食品を積極的に購入する施

策が地域経済循環の上でも重要である。

- ◎ 食の安全性を確保することは食の付加価値創出につながり、他の食品と比べて高い価格を設定することが可能といえる。
- ◎ 安全性が確保された道産食品は、他地域の国産品に比べて、道内在住者は平均で 12.0%、道外在住者は平均で 9.1%価格が高くてよいという結果が出た。
- ◎ 北海道産の乳・乳製品、魚介類、野菜は、安全性が高いイメージが根付いている。いずれも認知度が高く、食品そのものが北海道ブランドとして認識されている傾向があり、その期待感が安全性へのイメージを湧きやすくさせていると考えられる。
- ◎ 生鮮食品に北海道産、あるいは加工品の原材料に北海道産食品と表示されている場合は、ともに 6 割以上が購入意向を示した。

- ◎ 北海道内で起こった 4 つの事件（北海道産イクラによる食中毒事件、雪印乳業の集団食中毒事件、「白い恋人」の賞味期限改ざん事件、ミートホープ社の牛ミンチ偽装事件）は、10 年以上前に起こったイクラの食中毒事件を除いて、いずれも高い認知度で、全国的に大きな影響を与えたと考えられる。しかし、乳・乳製品や白い恋人については、現段階で大きくマイナスに作用しているようには感じられず、信頼を回復しているといえる。信頼回復の要素には、北海道の食の魅力として知られていることによるその実績とブランド力が背景にあるが、事件後の対応も大きな要素といえる。迅速な対応を取ること、社会的制裁をしっかりと受け止め、同じ問題が起こらないような経営体制をしっかりと再構成すること、再発防止のための組織体制の確立などが考えられるが、何よりも問題が起こった時にこそ、組織や体制を見直す契機とできるかどうか大きな分かれ道といえる。「信頼回復に真剣に努力している姿勢」も付加価値となる。
- ◎ 食の安全性をイメージ付けるためには、普段の取り組みの中で、実績やブランド力を高めていくことも重要。雪印乳業の食中毒事件は、企業そのものの再編を迫られる大きな出来事であったが、現段階の道産の牛乳や乳製品の購入意向は高く、牛乳や乳製品そのものが北海道の地域ブランドとして根付いていたことが、その背景にあると考えられる。白い恋人も道民自身が愛着を持っている商品であることが、販売再開後の売上増につながったと考えられる。

- ◎ 道内では、いくつかの認証制度が導入されているが、認知率はいずれも 1 割程度で、全国展開されている有機 JAS 認証も 3 割弱にとどまった。また、道内の認証制度では十勝ブランドの認知度が最も高かった。食生産地として広く知られており、農産物なども人気が高いことがその要因と考えられる。
- ◎ 認証制度については、消費者団体や独立した機関によるものであれば信用できると考えている人が多かった。また、安全性や北海道産を示す認証制度に対しては、一定の理解が得られており、食の安全性をアピールする手法として有効な方策の一つと考え

られる。

- ◎ 道内6圏域別の食の安全性イメージは、十勝が圧倒的に高く、釧路・根室地域はまだ改善の余地があるといえる。また、釧路・根室地域は、安全なイメージのある食品として魚介・魚介加工品に圧倒的な支持が見られるが、乳・乳製品の支持が北海道全体よりも低く、他の食品の安全性のイメージも弱い。海産物のみのイメージから、多様な食品で安全性が高いイメージを持ってもらえるような工夫が必要であろう。いずれにしても、釧路・根室地域は、「食の安全性」という側面を駆使した付加価値付けの工夫に大きな可能性を秘めているといえる。

Ⅲ 調査の概要

1 手法等

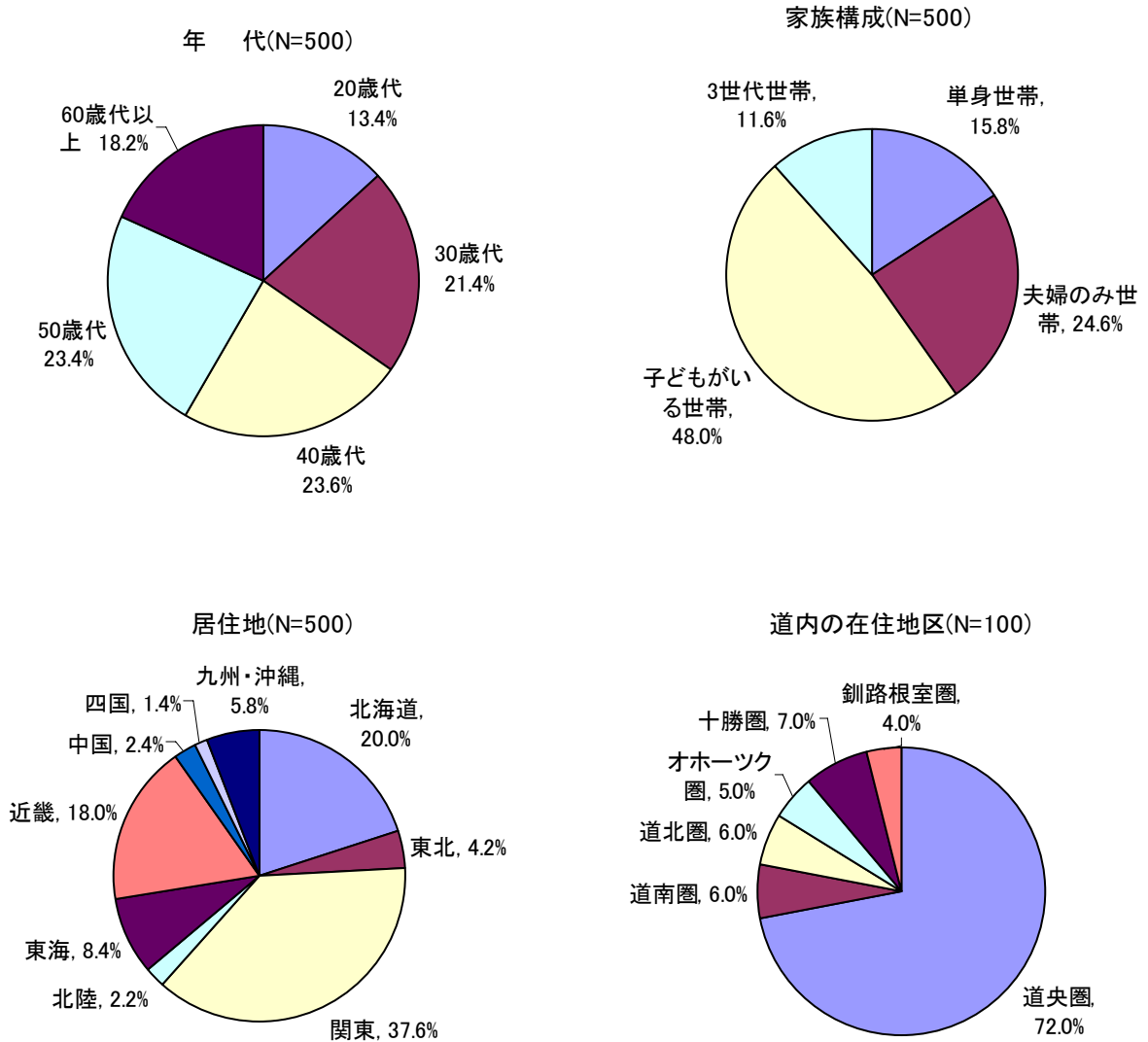
調査手法 : インターネット調査

※全国にモニターを有するインターネット調査会社にて実施

調査対象者 : 全国の消費者 500 人 (男女各 250 人)。うち道内在住者は 100 人。食の安心・安全に全く関心がない人を除いた一般消費者で、かつ、食品を購入する機会がある人

調査日程 : 平成 21 年 3 月 20 日 (金) ~ 同年 3 月 23 日 (月)

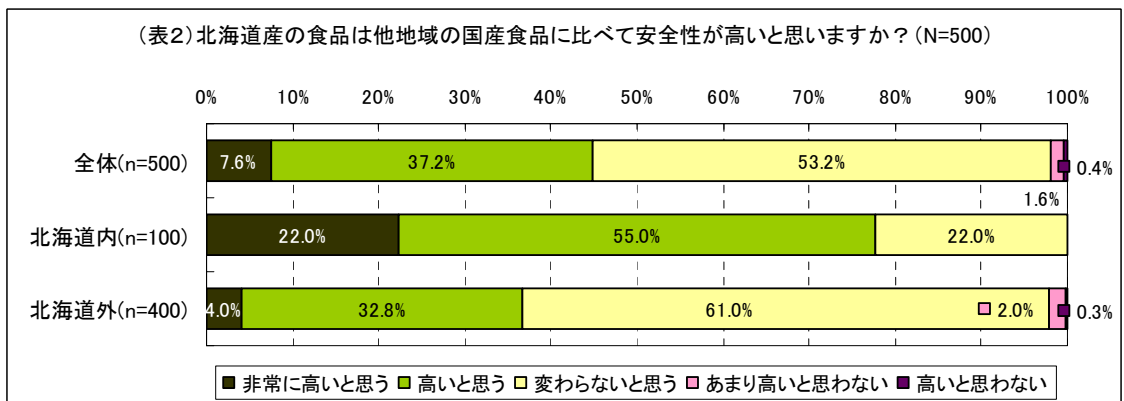
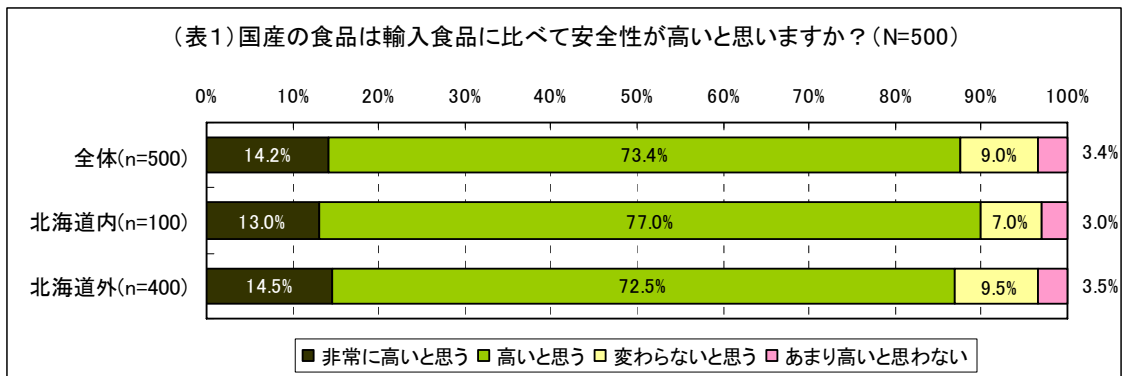
2 対象者の属性



3 産地別食品の安全性イメージと、北海道産食品の安全性について

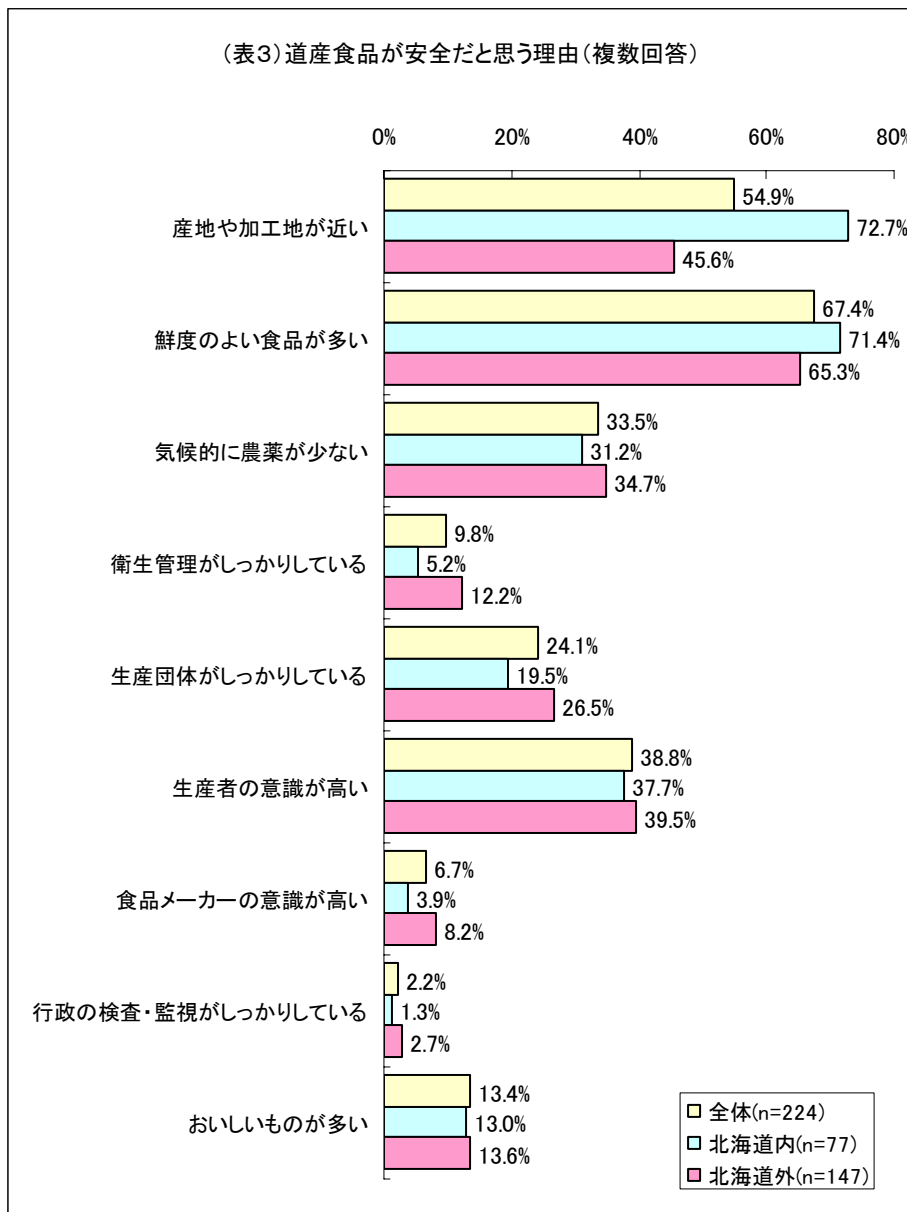
(1) 輸入品と国産品、国産品と道産品の安全性イメージ比較

国産食品と輸入食品を比較した場合、国産品の安全性の方が「非常に高いと思う」「高いと思う」と考えている人は全体で87.6%となった(表1)。また、北海道産食品が他地域の国産食品より安全性が「非常に高いと思う」「高いと思う」と考えている人は全体で44.8%となった(表2)。国産品と輸入品の比較に比べると割合は低いものの、半数近くの対象者が道産食品の安全性を感じている。



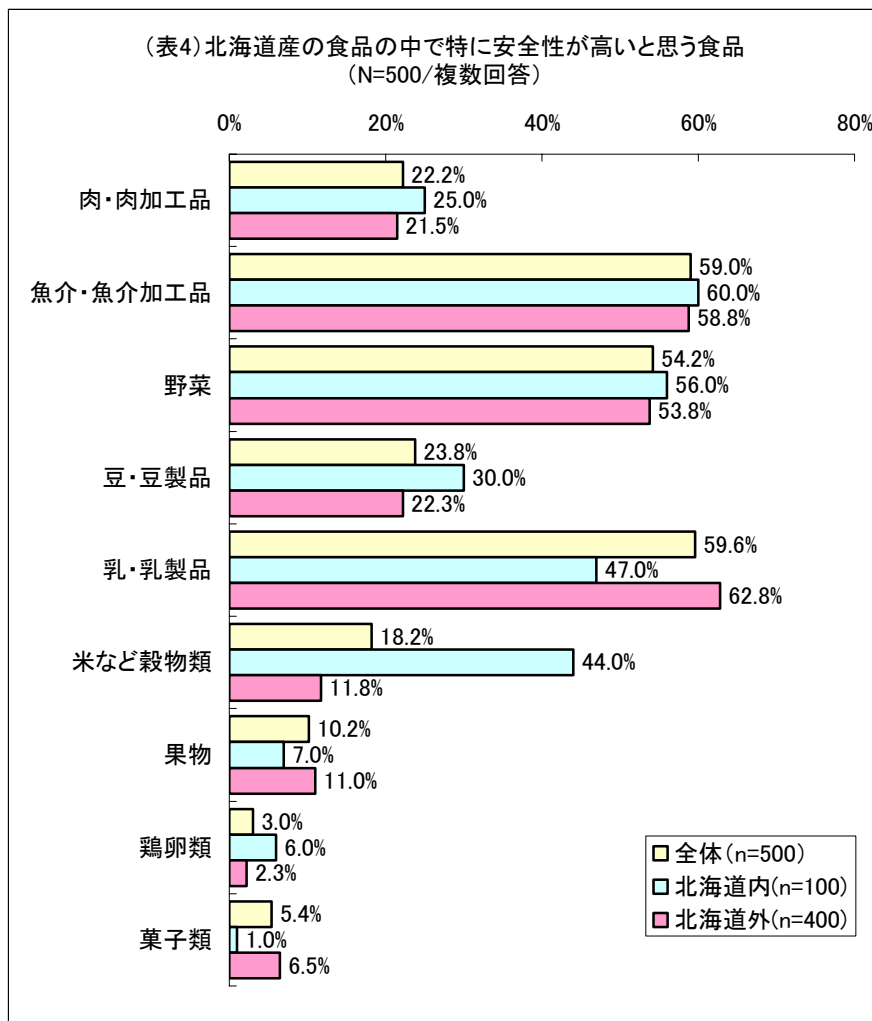
(2) 道産食品が安全だと思う理由について

道産食品が他地域の国産食品より安全性が「非常に高いと思う」「高いと思う」と回答した人に、その理由を尋ねたところ、「鮮度のよい食品が多いイメージがあるから」「産地や加工地が近いイメージがあるから」「生産者の意識が高そうだから」といった回答が多かった(表3)。



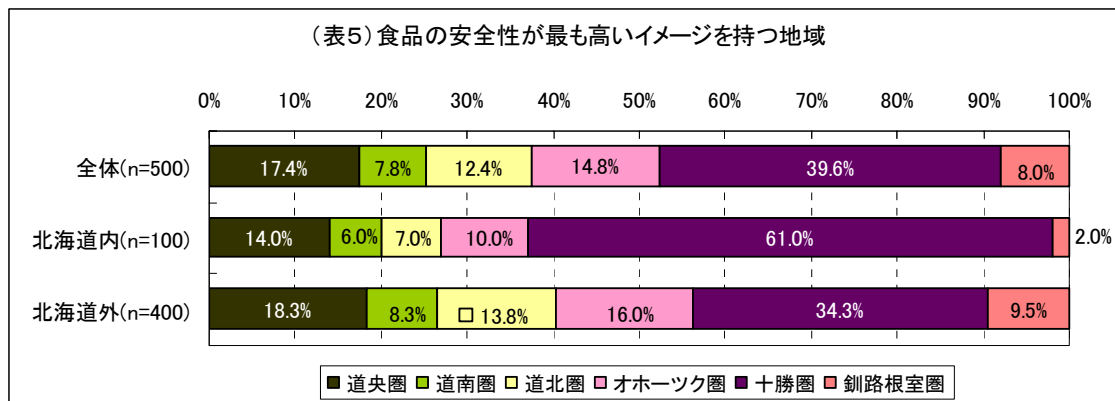
(3) 安全性が高いと思う北海道産食品について

北海道産食品で安全性が特に高いと思われる食品を三つまで選んでもらったところ全体で「乳・乳製品」「魚介・魚介加工類」「野菜」の順で高い(表4)。しかし、道内在住者と道外在住者ではやや傾向が違い、道内在住者では比較的バランスよく評価されているのに対し、道外在住者はトップ3の回答に偏っている傾向が見られる。特に、「米など穀物類」は、道内在住者では44.0%と高い回答率であるが、道外在住者は11.8%となっている。



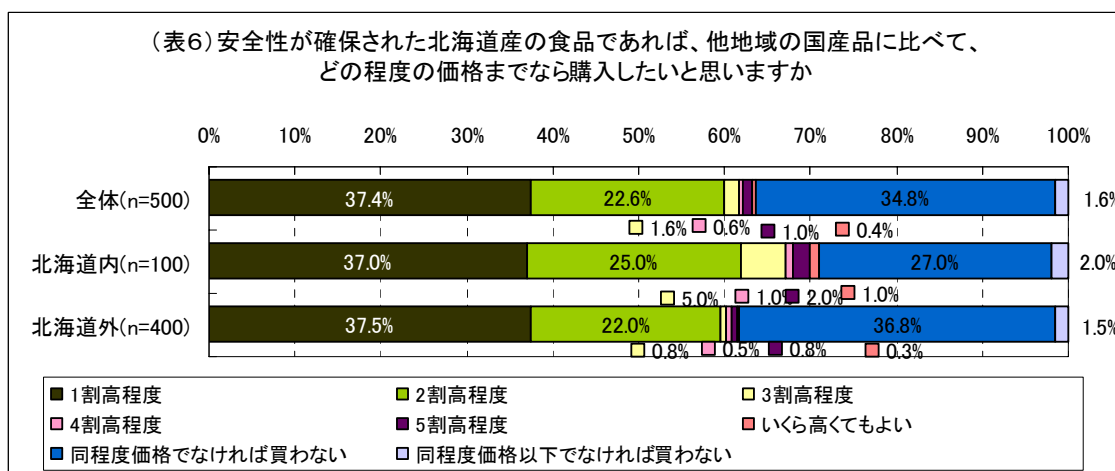
(4) 道内6圏域の安全性イメージについて

道内を6圏域に分けて、最も食品の安全性が高いイメージを持つ地域を尋ねたところ、全体で「十勝圏」が39.6%と最も高かった(表5)。道内在住者の評価も高く、また、道外在住者では十勝圏の観光旅行等の経験者は15.8%と6圏域の中では最も低いにもかかわらず、34.3%が「十勝圏」を評価しており、食の十勝ブランドは道内外でしっかり根付いているといえる。



(5) 食の安全性と購入限度価格について

安全性が確保された道産食品であれば、他地域の国産品と比べてどの程度までなら購入したいかを尋ねたところ、「1割高程度」が37.4%、「同程度価格でなければ買わない」が34.8%、「2割高程度」が22.6%であった(表6)。「いくら高くてもよい」「同程度価格以下でなければ買わない」と回答した人を除いた平均の価格アップ率を計算したところ、全体で9.7%となった。

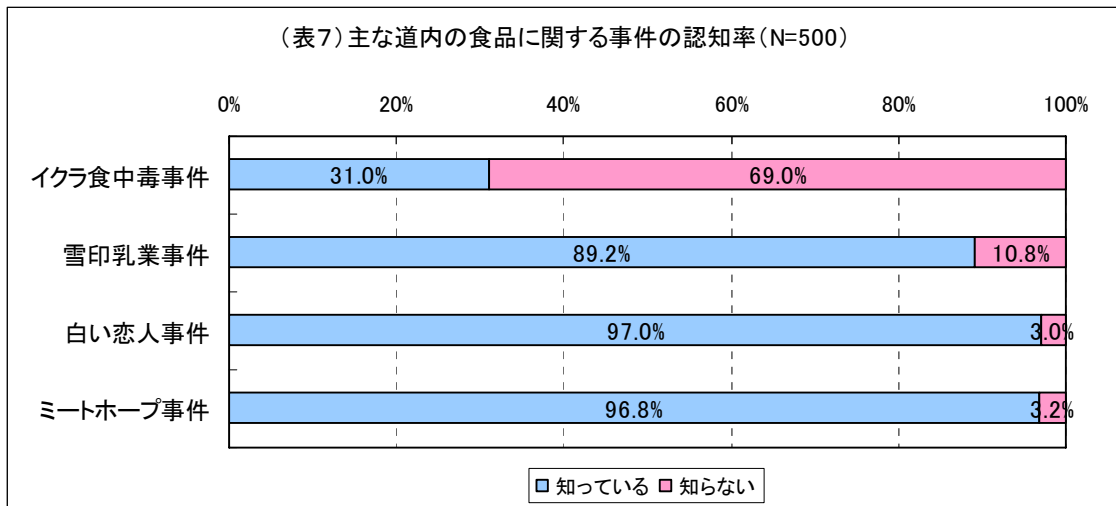


4 道内における食品関係の事件について

過去に起こった北海道関連の4つの食品事件（①平成10年の別海町産イクラ醤油漬けによるO157食中毒事件、②平成12年の雪印乳業大樹工場で生産された脱脂粉乳が原因で起こった集団食中毒事件、③平成19年の「白い恋人」の賞味期限改ざん事件、④平成19年のミートホープ社牛ミンチ偽装事件）について、認知やその後の対応、現在の購入意向などを尋ねた。

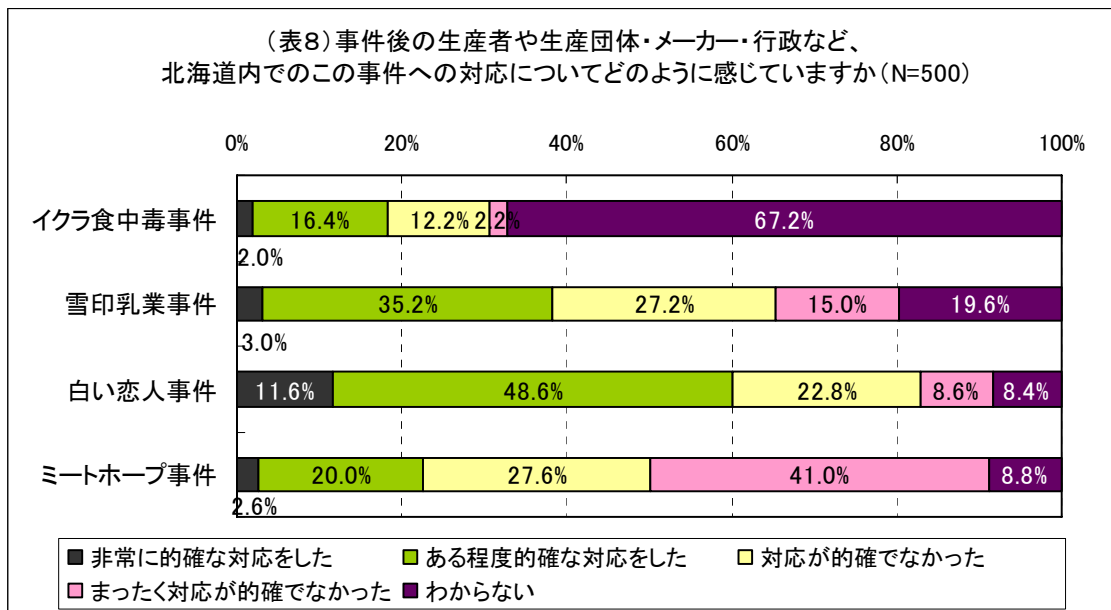
（1）認知について

4つの事件の認知率は、10年以上経過したイクラ食中毒事件が3割程度と低いものの、事件からまもなく10年を迎える雪印乳業の集団食中毒でも89.2%と高く、一昨年に発覚した白い恋人、ミートホープは9割以上の認知率となった（表7）。



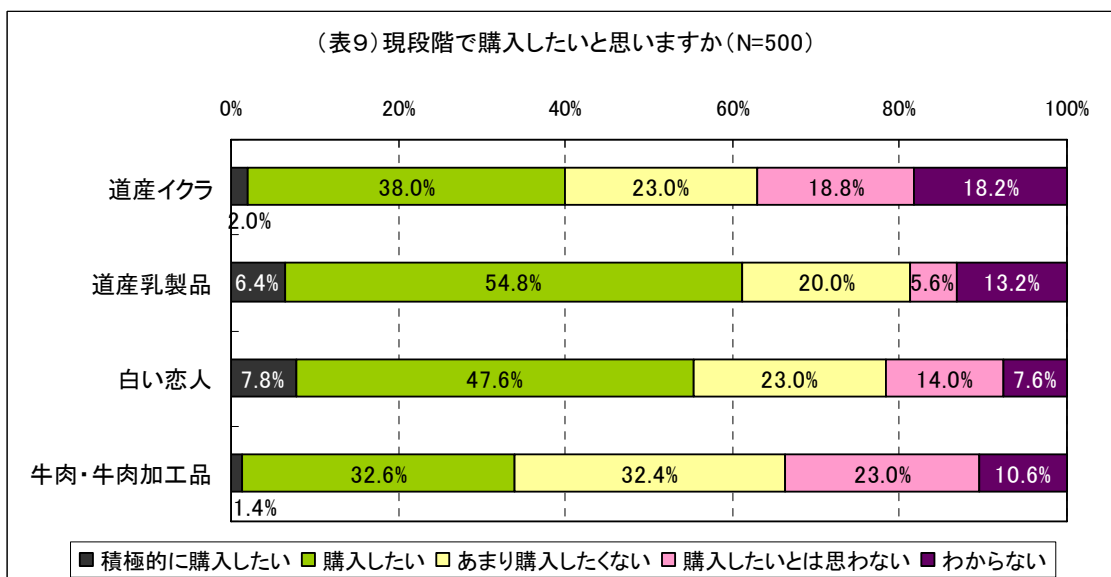
(2) 事件後の対応について

事件後の対応について、ミートホープ事件については「対応が的確でなかった」「まったく対応が的確でなかった」と回答した対象者が 68.6%にのぼった。4つの事件の中では最も高い割合である（表8）。また、「白い恋人」の事件では「非常に的確な対応をした」「ある程度の確な対応をした」と回答した対象者が 60.2%と半数を超えた。



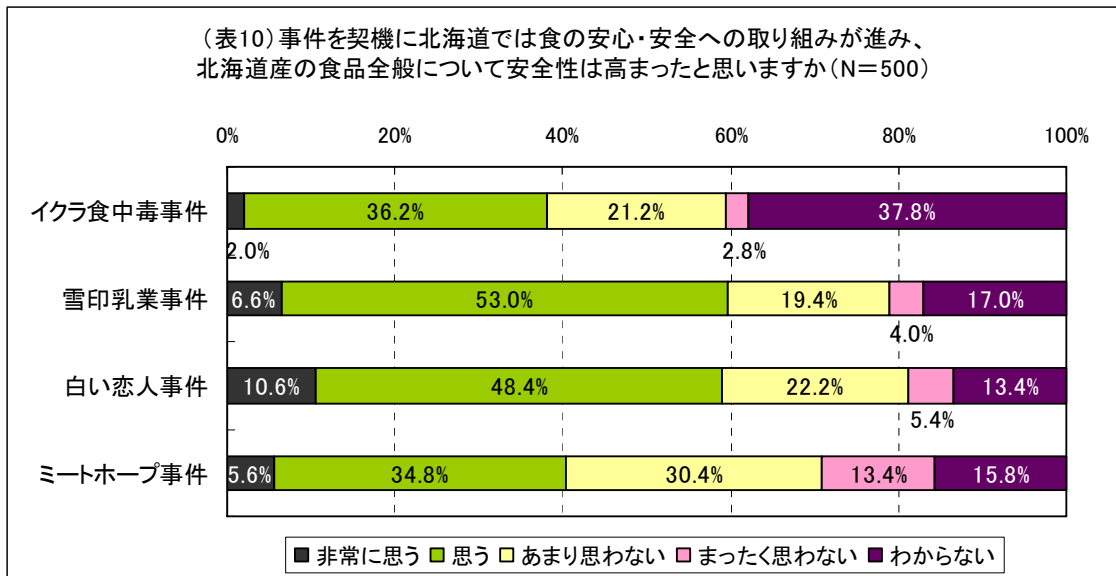
(3) 現段階の購入意向について

さらに、現段階での購入意向でも「白い恋人」は「積極的に購入したい」「購入したい」を合わせて 55.4%と高かった（表9）。また道産乳製品の購入意向も高くなっている。



(4) 事件を契機とした食品の安全性について

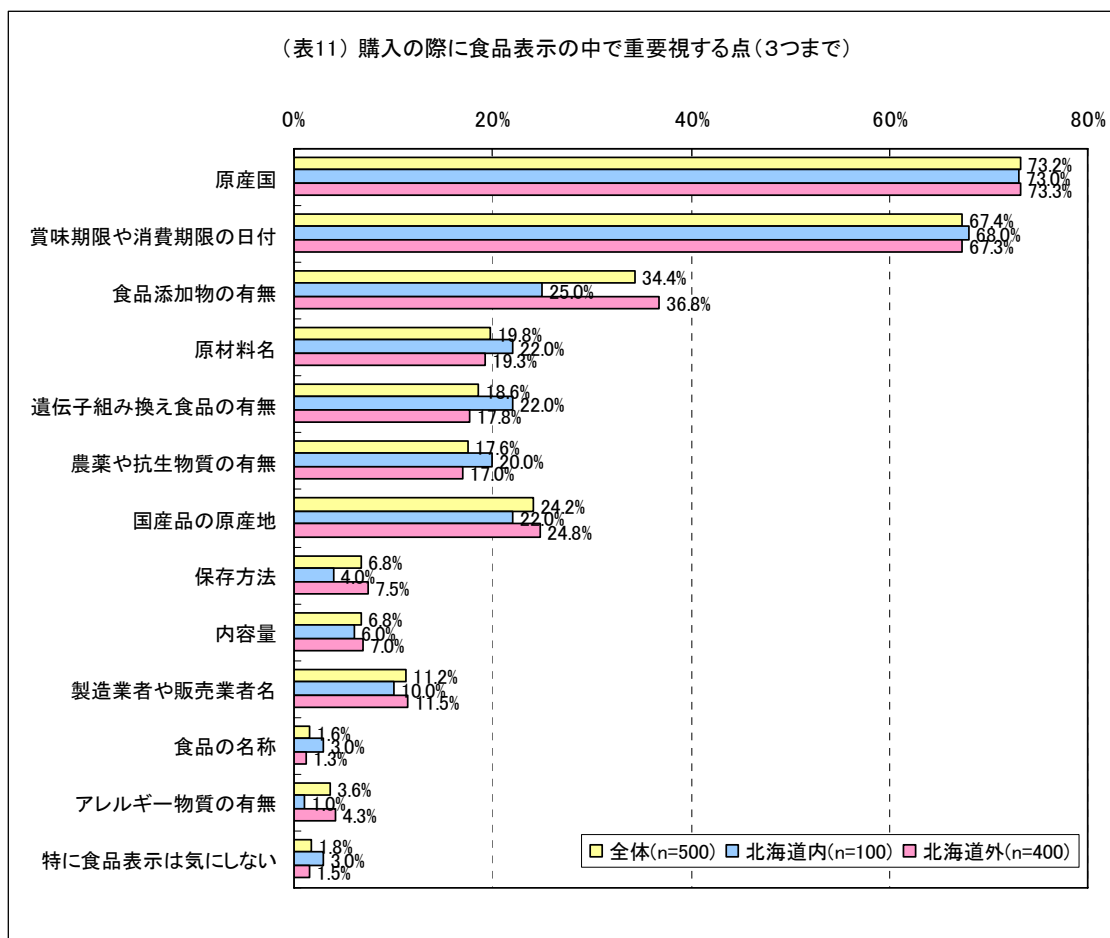
それぞれの事件を契機に、道内で食の安心・安全の取り組みが進み、道産食品全般の安全性が高まったと思うかを尋ねたところ、雪印乳業事件や白い恋人の事件で「非常にそう思う」「思う」とした人が6割近くになった(表10)。



5 食品表示と認証制度について

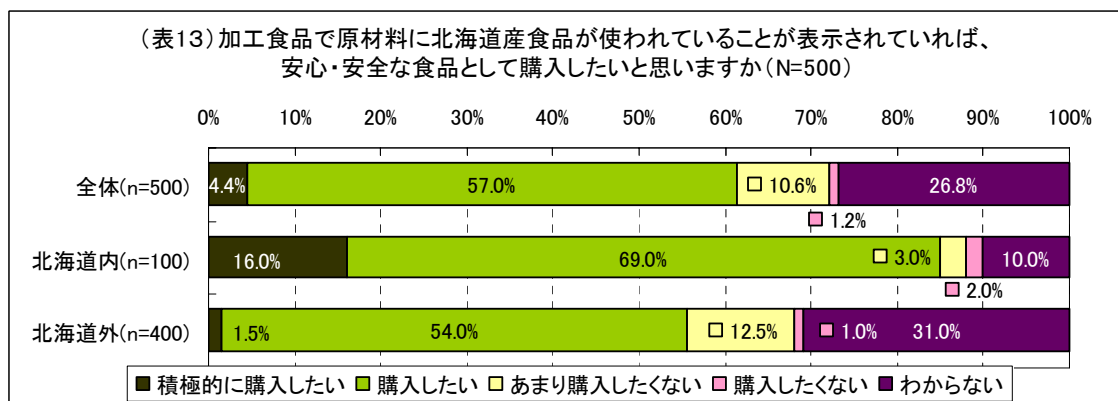
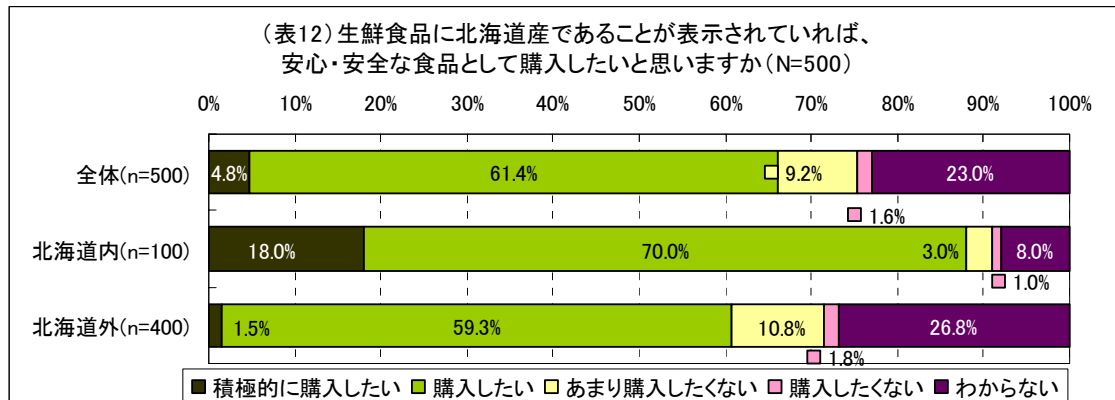
(1) 購入の際に重視する食品表示

食品購入の際に、重視する食品表示は、「原産国」73.2%、「賞味期限や消費期限の日付」67.4%、「食品添加物の有無」34.4%、「国産品の原産地」24.2%という順になった(表11)。道外在住者は道内在住者に比べて「食品添加物の有無」を重視する傾向が、一方、道内在住者は「遺伝子組み換え食品の有無」を重視する傾向がやや見られた。



(2) 道産食品表示と購入意向について

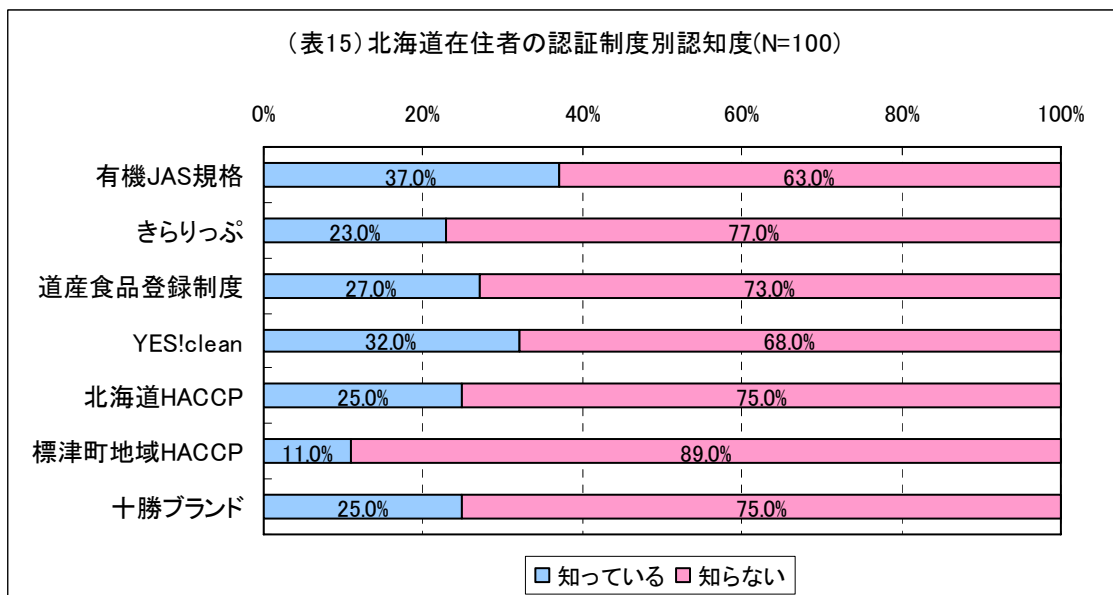
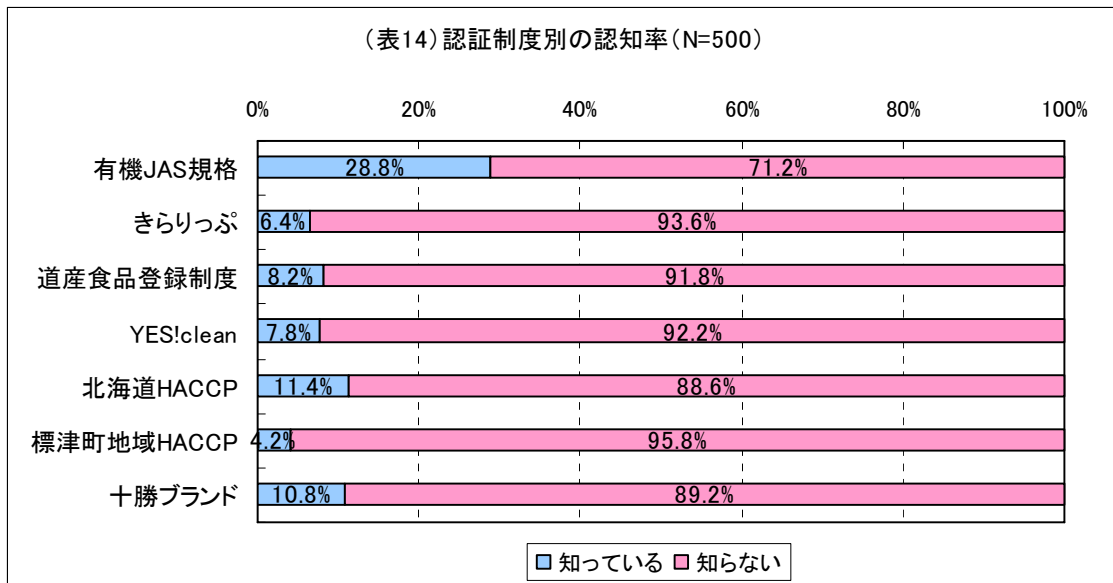
生鮮食品に北海道産であることが表示されていれば、安心・安全な食品として購入したいかを尋ねたところ、「積極的に購入したい」「購入したい」が 66.2%となった（表 12）。また、加工食品の原材料に北海道産食品が使われていることが表示されていれば、同様に 61.4%が購入意向を示した（表 13）。



6 認証制度について

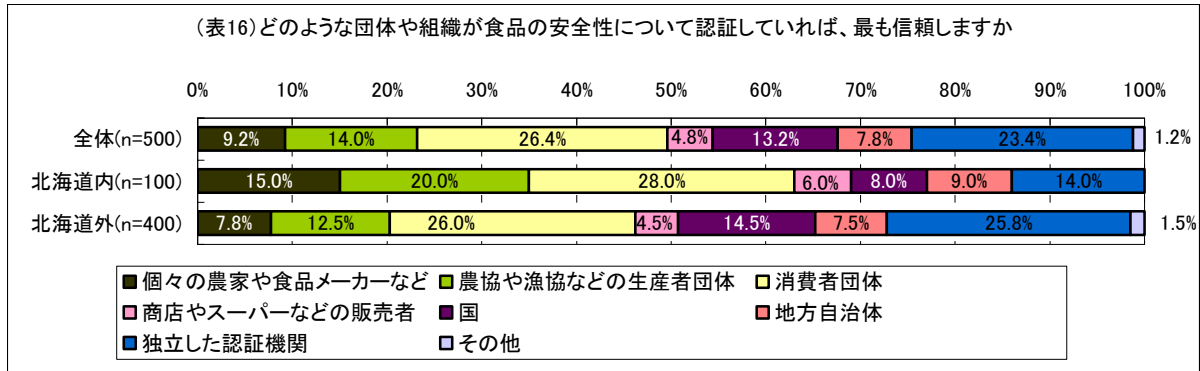
(1) 認証制度の認知率について

道内ではさまざまな認証制度が創設されているが、それぞれの認証マークを示して認知を尋ねたところ、全国展開である有機 JAS 規格については3割程度の認知率となったが、北海道や道内各地で取り組んでいる制度の認知率はほとんどが1割以下であった(表14)。道内在住者のみに限ると、有機 JAS 規格に次いで、化学肥料の使用量や化学合成農薬の使用回数など、一定の基準を満たしたクリーン農産物を認証する「YES! clean」の認知度も高かった(表15)。



(2) 信頼できる認証団体について

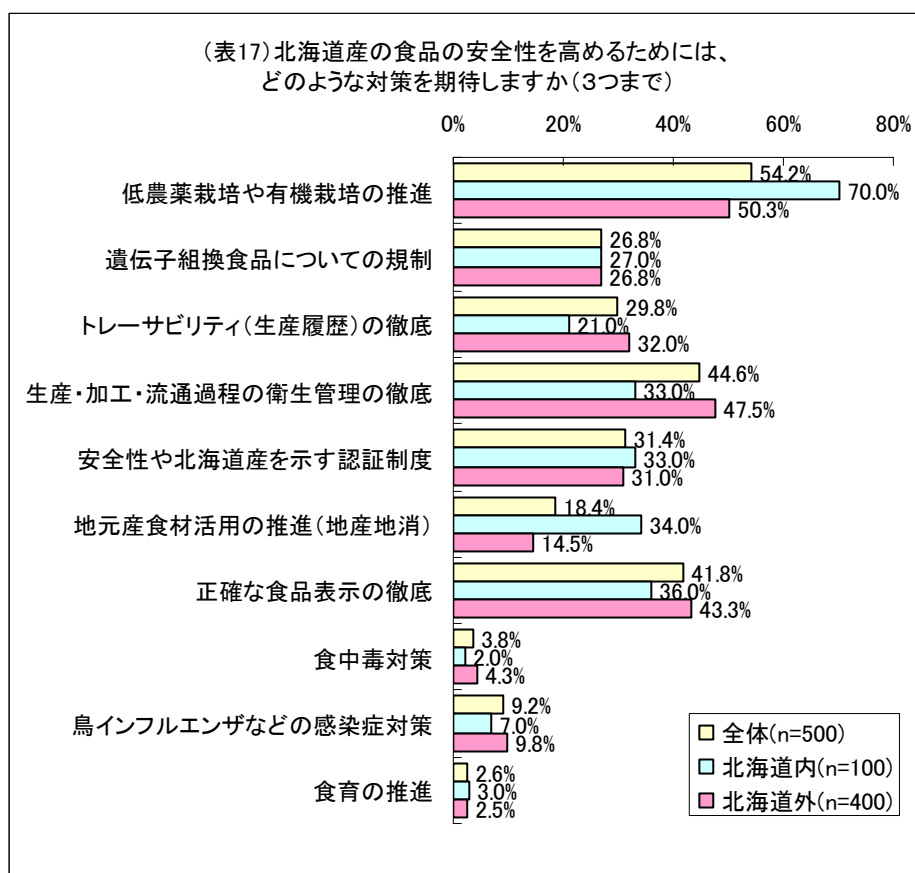
また、食品の安全性を認証する団体や組織として、最も信頼できるのは、「消費者団体」「独立した認証機関」「農協や漁協などの生産者団体」という順になった（表16）。



7 今後に向けて～食の安全性を高めるために～

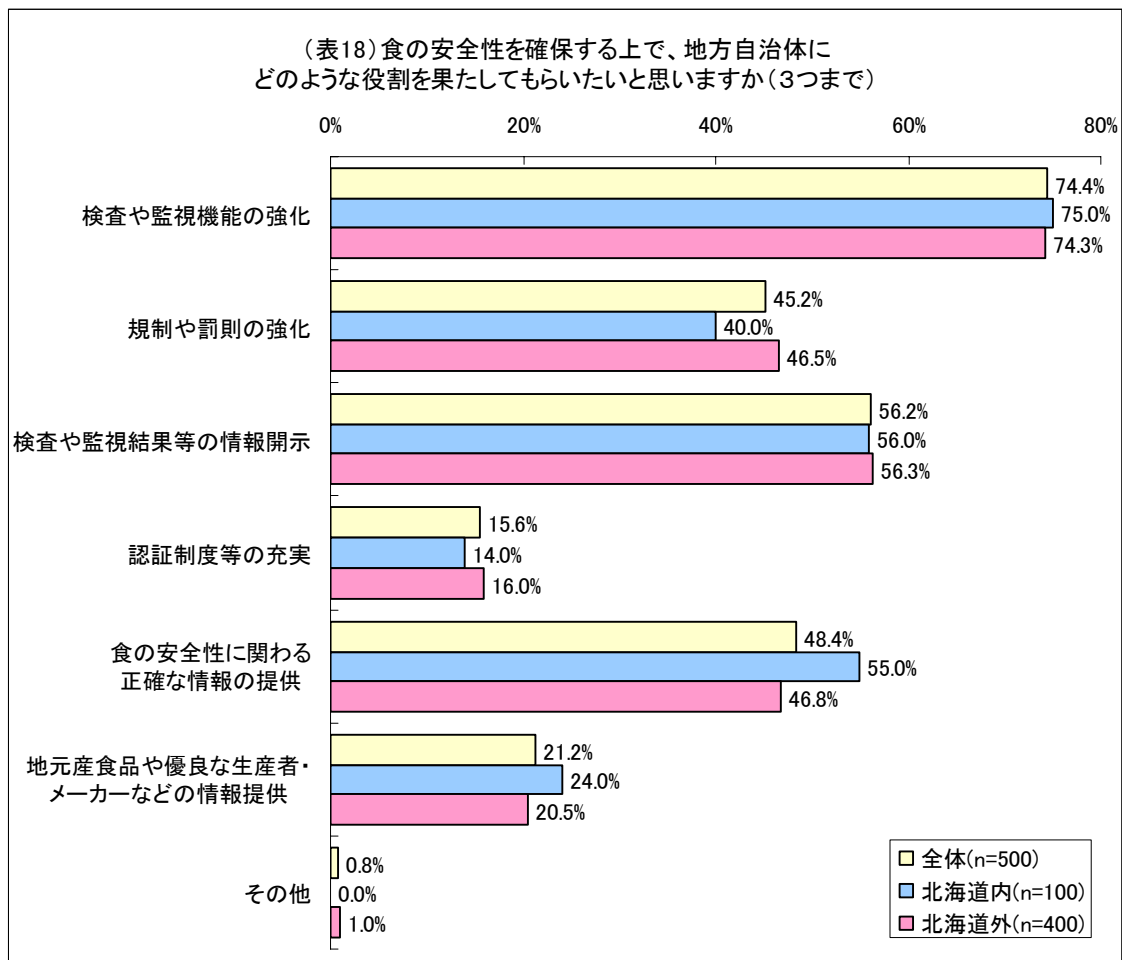
(1) 北海道産食品の安全性を高めるための対策について

北海道産食品の安全性を高めるために期待する対策は「低農薬や有機栽培の推進」や「生産・加工・流通過程の衛生管理の徹底」、「正確な食品表示の徹底」、「安全性や北海道産を示す認証制度」などが高かった（表 17）。北海道在住者では、低農薬や有機栽培の推進に期待する人が7割と非常に多く、地産地消への期待も高くなっている。一方、道外在住者では、低農薬や有機栽培の推進と同程度で、生産・加工・流通の衛生管理や正確な食品表示への期待が高かった。



(2) 地方自治体の役割

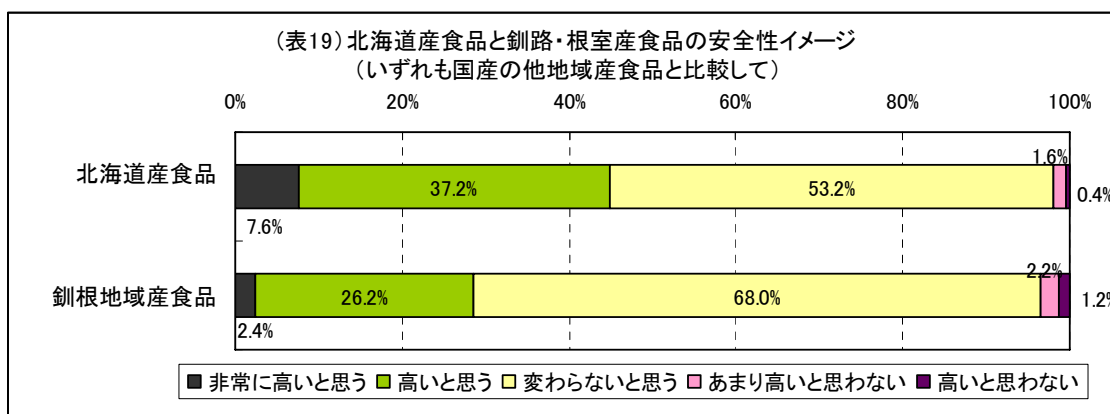
食の安全性を確保する上で地方自治体に果たしてもらいたい役割は、「検査や監視機能の強化」74.4%、「検査や監視結果等の情報開示」56.2%、「食の安全性に関わる正確な情報の提供」48.4%、「規制や罰則の強化」45.2%となった（表18）。



8 北海道産食品（全般）と釧路・根室産食品の安全性比較について

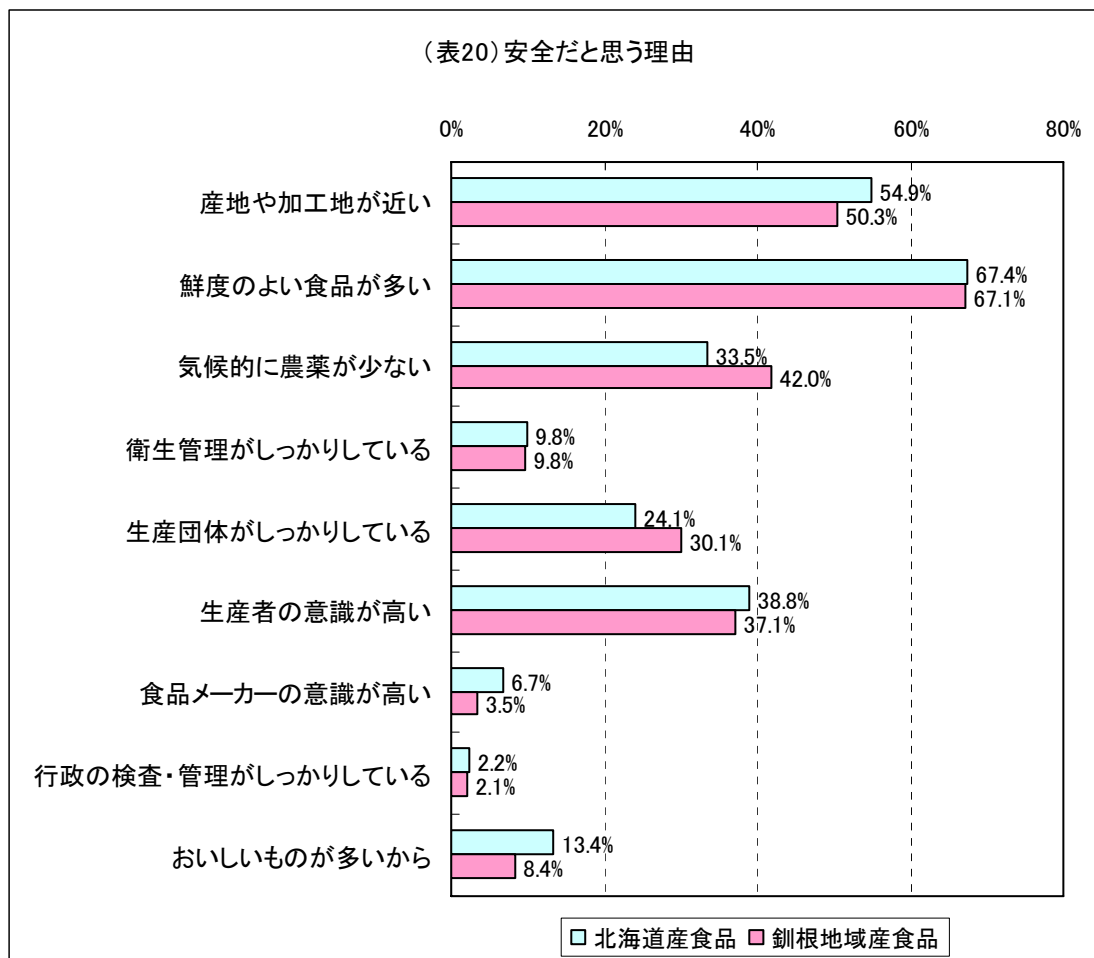
（1）食品の安全性イメージについて

「釧路・根室地域産食品は他地域の国産食品より安全性が高いと思うか」「北海道産食品は他地域国産食品より安全性が高いと思うか」の2つの質問の回答を比較してみると、釧路・根室産食品は北海道産食品よりも安全性が高いイメージを持っている人の割合は少なかった（表19）。鮮度の高い魚介類や広大な酪農地帯を背景に生産される生乳など、道内でも誇れる食品が生産されているにもかかわらず、安全性の高い食生産地という点では、北海道全体のイメージを上回るほどではない。釧路・根室地域の産地としての魅力や食品の特徴を伝えていくことで、安全性の高い食生産地として認知されることが必要であろう。



(2) 安全性が高いと思う理由について

北海道産食品と釧路・根室産食品を他地域の国産品よりも安全だと思う人に、その理由をそれぞれ尋ねたところ、釧路・根室産を安全だと思っている人では「気候的に農薬が少ない」や「生産団体がしっかりしている」の回答が多く見られた（表20）。



(3) 安全性が高いイメージのある食品について

安全性が高いイメージがある食品を北海道産と釧路・根室産で比較してみると、釧路・根室産のものは「魚介・魚介加工品」で高くなっている（表 21）。しかし、「乳・乳製品」は北海道全体のイメージに及ばない。魚介のほかに安全性が高いと感じてもらえる食品をしっかりと定着させ、釧路・根室地域が食の生産地としてバラエティ感を持ってもらえるような工夫が必要で、その方向に向けた取り組みが期待される。

